2025年1月29日•31日　水曜祈り会•金曜集会　　吉田真司

本日の学び　　テーマ:「イエスの愛による権威」　テキスト:マタイ8章5節-13節

【理解の手がかりとして】

本日のテキストは「百人隊長の僕のいやし」である。このように福音書には多くのいやしの奇跡が報告されている。そしてそれらを経験するのは、当時のユダヤ社会では、疎外された者たちであった。

イエス様の宣教活動は、まずガリラヤを中心として行われた。エルサレムが宗教的•政治的に中心であったのに対して、ガリラヤは地方であり、そこに住む人々は貧しかったと言われる。

「異邦人のガリラヤ、暗闇に住む民は大きな光を見、死の陰に住む者に光が射し込んだ」(マタイ 4:15-16)と言われるように、ユダヤ人以外の人々も大勢住んでいたし、病気で苦しみ、虐げられた貧しい人々が多かったのである。

「イエスはガリラヤ中を回って、諸会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、また、民衆のありとあらゆる病気や患いをいやされた」(4:23)とある。このような情報は一目散に伝わっていて、本課のテキストに登場する「百人隊長」の懇願があるものと推察する。

百人隊長は言う。「主よ、わたしの僕が中風で家に寝込んで、ひどく苦しんでいます」(8:6)と。「中風」とは麻痺の症状であると説明されたりする。マタイでは「ひどく苦しんで」いる状態とされているが、並行箇所のルカでは「死にかかっていた」(ルカ 7:2)と伝えられ、より深刻で予断を許さない事態であることが分かる。

その懇願を受けてイエス様は「わたしが行って、いやしてあげよう」(マタイ 8:7)と言われた。これは何気ない言葉のようで、実は驚くべき一言である。なぜなら、当時のユダヤ人は、異邦人の家には入らなかったからである。

レビ記に「清いものと汚れたものに関する規定」(11 章)がある。そこには「食べて良いもの(触れて良いもの)」とそうでないものとの区別がある。ユダヤ人はこの規定に厳密に従うことが求められ、それゆえ、その規定外の食生活をしている異邦人との交わりは律法の禁忌事項に抵触したのである。その食物の場合もそうであるが、病(レビ 13 章)の文脈でも「汚れ」(13:3)と断じられ、関係を遠ざけられた。

イエス様が言われた言葉に「安息日は、人のために定められた」(マルコ 2:27)とある。そう本来、律法は人のためにあるのであって、そのとおりの律法の完成者としてイエス様は行動される。イエス様のいやしとは、直接的な病のいやしも驚きであるが、それ以上に自らそこに赴き、遠ざけられた関係を修復される、そこに真のいやしがあるのではないか。

ガリラヤの民は、そのように行動されるイエス様の姿に真のキリスト(救い)を感じ、発見して、そこに真の権威(まことの愛に基づく権威)を見出していったのではないか。

蓮見和男氏は言う。「この物語は、奇跡やいやしの物語であるよりも以上に、信頼の物語です。•••ふつう苦しみや悩みがあると、疑いやつぶやきや不満が支配するはずなのに、ここには信頼が先に立っています。この素朴な信頼こそ、今日不足しているものではないでしょうか」(『聖書の使信 1　マタイによる福音書上』)と。

これからイエス様への「信頼」というテーマも示される。蓮見氏はこうも言う。「この百卒長は、聖書の中で最も記憶すべき言葉の一つを語っています。『主よ、わたしの部屋の下に、あなたがおはいりになるほど、わたしは値打ちのある者ではございません』。•••神の前に自分は真に不十分だと知るとき、信頼の心が芽生える時です。ですから、百卒長はつづいて、さらにもっと記憶すべき、すばらしい言葉をはきます。『ただお言葉だけをください。そうすれば、わたしの僕は、いやされるでしょう』•••信仰には、弱さの表現とともに、力強い、ひたむきな信頼があります」(上掲書)。

こうして「(イエス様に対する)信頼」ということが今テキストの着眼点であるということが示される。そしてそれは「まことの権威」に対する信任である。この百人隊長はその字のとおり部隊長である。ある意味で「権威」を持つ存在であった。テキストにあるように、彼の言葉に部下は素直に従うという経験を持っていた。そのような経験を持つ者であるからこそ、彼は「まことの権威」に対する信頼(信任)をわきまえていたと言えよう。

テキストはここでは終わらない。「御国の子ら」(8:12)が引き合いに出される。御国の子らとはユダヤ人(選ばれた民)のことである。イエス様は、彼らの中に形骸化した信仰を見、神へのひたむきな信頼を認めておられない。その彼らの信仰的退廃を指摘し嘆くべく、この百人隊長のひたむきさを際立たせておられるように感じる。―――「この物語は、日常の諸問題と困窮との中で信仰を本当に生きる代わりに、自分が父祖たちのものであることをあてにしている、敬虔な安心感に対する警告であった。」(NTD 新約聖書註解)

さて、昨日 1/28 に行われた平和宣言学習会にて、講師の志村真氏(日本基督教団　飯塚・直方・田川教会牧師)から学んだことを紹介しておく。

「イエスの一貫した非暴力的宣教の中で、何よりも取り上げたいのが『癒し』である。なぜなら、イエスの癒しは暴力の被害者の癒しを多く含んでいるからである。ローマと傀儡政権による二重の支配・抑圧、力を持つ者からの身体的・心理的暴力が厳に存在していた。その暴力による苦しみにイエスは寄り添い、癒した。」この指摘から、本課テキストの百人隊長の僕が置かれた状況、その病と命の危機を重ねて考えた。志村氏は言う。「今日、内戦やテロリズムによって多くの人が傷つけられ、その中には『憑依』や PTSD を含む戦争性精神疾患がある。そうした人々の治療とケアに関わることは、非暴力のイエスに従うことである。」

「イエスの愛による権威」―――イエス様の権威がどのようにして表されていったのか、この世の権威の有様とは真逆な仕方、その愛の権威(ことば)にひたむきに信頼する生き方とは何か、そのことをも考えさせられる学習会であった。

【聖書教育より】

「イエスの権威は愛から生じ、その言葉は愛するゆえに力を発揮される」(聖書の学び～愛による権威)

「イエスの言葉は、時間と空間を超え、様々な壁を越えて世界の人々に働いています。今なお語り続けられるイエスの言葉には、真の赦しと癒し、愛と平和をもたらす力があります。」(聖書の学び～すべてを超える愛の力)